



幸せに生きる

今年の2月にロシアがウクライナに攻め込み、戦争が始まりました。6月の今もロシア軍の攻撃は続き、ウクライナ市民の犠牲は増え続けており、国際社会からはロシアへの厳しい非難の声が上がっています。連日マスコミが報道する戦いや崩壊の様子、避難する人たちの恐怖の様を知るにつけ、文明の発達した現代社会で武力でしか解決できないことがあるのだろうかと、胸が痛みます。



私は、1951年生まれで「戦争を知らない子供たち」です。東北の片田舎で育ちまして、幼い頃、仏間に飾られる軍服姿の遺影に違和感を持ち、また、村祭りで神社の参道の片隅に白装束で物悲しくハーモニカを吹く人が怖かったことを覚えています。それが傷痍軍人だということも遺影は戦争で亡くなったのだと知ったのも大きくなってからでした。今、遠くで起こった出来事をリアルタイムで見せられながら、私に何が出来るかを考えます。私が出会ったお二人を紹介します。

90歳を過ぎた知人は、「戦争体験証言会」で話されたことを『小学6年生の時に感じた戦争への疑問』という冊子にまとめました。彼女は、戦争の真っ最中の小学6年生の時、戦利品展示会を見に行きました。鉄砲の弾が当たった穴だらけの鉄兜の展示に中国兵士に同情し、中国少女のハガキの翻訳文を読んで凍り付いたのでした。それは、戦死した中国兵のポケットに入っていたもので「兵隊さん、毎日・毎日、ご苦労様です。早く東洋鬼(トンヤンキー)をやっつけて、平和を取り戻すように頑張って下さい。」と書いてあったのです。それは、彼女が学校で中国派遣の日本の兵隊さんに慰問文に書いていた文章と同じ文章の裏返しだったのです。悪い支那兵をやっつける日本軍は、中国の小学生から感謝されていると思い込んでいた彼女は、混乱して日本の国策に疑問を持ったということです。

彼女は、戦後77年間経った今でも非戦国である日本に暮らす若い世代に送る言葉かけを三つあげました。
 ①弱い者イジメはダメ！！！
 ②嘘つきはダメ！！！
 ③誤魔化しはダメ！！！
 日常生活の当たり前のことを見つけたその都度、その場で、見て見ぬ振りをしないで、現場で熱心に身につけさせることだと思います。彼女は、先を生きていく大人として筋を通しているのです。

もう一人は若い絵本作家さん。母と息子で初めて訪れた憧れの街、ニューヨークで、男の子と自由の女神さんとの会話が描かれた絵本『じゅうのめがみさん』(はた みき作・訳 文芸社 2022年)を書き上げました。旅する親子の会話はほほえましく、視野を広げる世界が描かれます。世界の国々をよく知ることは、これからを生きていくのに欠かせないこと、自由の女神さんと会話する男の子に、これからも平和な世界で暮らす願いを込めていました。作家に思いを寄せました。年を重ねて多くの人に出会い、それぞれの思いに心を寄せながら「幸せに生きる」ということを見つけていきたいです。

(磯部)

『0 メートルの旅

日常を引き剥がす 16 の物語』

岡田悠(おかだ・ゆう)

ダイヤモンド社

(2020 年)



コロナになり、丸 2 年。

海外渡航禁止というニュースを見ただけで、圧迫感・抑圧感を一方的に感じていた私。0 メートルの旅？ 日常を引き剥がす？ のフレーズが妙に引っかかり、無性に読んでみたくなった。

この本は、有給休暇取得率 100% のライター兼、会社員である岡田さんが紡ぐ冒険譚である。そして、新しい旅の形を教えてくれるガイドブックでもある。

旅行が簡単にできなくなった世界(コロナ禍)になつても、旅立つことを決して諦めなかつた岡田さんのパッションは、凄まじい。旅行に行けない…だから、どうするか。前のめりと言つていい程のレジリエンスマインドは、ぜひ見習いたいものだ。

一度はくじけ、絶望感にさいなまれても。閉塞感をそのままにせず、自分なりに工夫・アレンジし、少しでも豊かに旅を楽しむ姿は、生きる力がみなぎつている。

旅とは何か…を読後、いろんな角度から私たちに問いかけてくる。想像力と行動力で乗り切るサバイバーの著者の存在が、ふさぎ込み気味の現代に元気を分けてくれる。まるで、旅好きのためのエナジードリンクのようだ。

コロナの無い世界に行きたい！

タラレバを言つても、残念ながら日常は劇的に変わらない。見方を少し、角度を付けてみるだけで、自分の世界は、今よりも拡げられるのかもしれない。まずは、読書で旅に出てみては？

きっと、あなたの旅の概念を 180 度変えてくれる一冊になるだろう。

(木下)

『パチンコ』

ミン・ジン・リー著、

池田真紀子訳

文藝春秋

(2020 年)



日本統治下の朝鮮半島で生まれ育つたソンジャは、16 歳で初恋の相手の子どもを宿した。けれども彼には妻子がいた。絶望するソンジャに、牧師のイサクは、お腹の子の父親になると申し出る。二人は結婚し、日本へと渡つた。

大阪で暮らすイサクの兄夫婦の家に身を寄せて、ソンジャは長男を産み、次いで夫イサクとの間に次男を授かる。子のない兄夫婦は、ソンジャの息子たちを我が子のように慈しみ、家の中は愛に満ちていた。しかし戦中、戦後を日本で暮らすコリアンの家族は、貧困と差別を生き抜かねばならなかつた。

学校でのいじめに傷つきながら、長男は勉学に励み、次男はけんかに明け暮れた。別々の道を歩むかに見えた 2 人だが、共にタイトルの「パチンコ」業界に携わっていくことになる。

苦労を意味する韓国語「苦生(コセン)」は女性の一生を表す言葉だと言う。「苦労は女の宿命」。性別も出自も変えられない。宿命を受け入れるのか、拒むのか、家族のそれぞれが選択していくドラマだ。

著者は韓国系アメリカ人で、日本での丹念な聞き取りを経て、この本を書き上げた。日本社会の糾弾というような単純な内容ではない。国や民族の狭間で生きる人々の複雑な心境を描き出し、恐らくどの国の人も読んでも共感できる作品になっている。

テーマは深刻だが、あたたかなエピソードの数々に心がなごむ。昭和の暮らしぶりが垣間見えて、懐かしさも覚える。会話の部分が、こなれた大阪弁に訳されているところも、いい感じだ。

上下巻の長編だが、長さを感じさせない。物語にぐいぐいと引き込まれる快感を味わえるのではないだろうか。

(K ナカノ)

『さよなら！一強政治』

徹底ルポ小選挙区制の日本と
比例代表制のノルウェー

三井マリ子
旬報社
(2020年)



この本には、三井さんのこれまでの選挙戦での問題点が書かれていて読み進んでいくと腹立たしくて頑張れ！と応援しながら読みました。～徹底ルポ小選挙区制の日本と比例代表制のノルウェー～とあるように、日本とノルウェーの選挙制度を比べています。大きな違いは、選挙＝政治への関心度の違い、国民性の違いです。

ノルウェーの比例代表制選挙は、候補者ではなく政党に投票します。選挙活動は決められた会場に政党の代表が並び、有権者に政策を訴えますが、会場は満席になり、有権者の関心の高さを感じます。高校生のための「スクール・エレクション」とは、ノルウェー全土で国政選挙や統一地方選挙本番の一週間前までに行う“模擬選挙”のことで、本番の選挙と同じことが学校内で展開されます。生徒会の主催で、教員の介入は一切なく、高校生たちはのびのびと「生きた政治」を学んでいます。高校の校長の中にはみずからが政党の市議会議員もいて、ノルウェーでは地方議員は通常の仕事や学業をしながらの無給のボランティアなので、市議会議員を務めるのは珍しくないです。

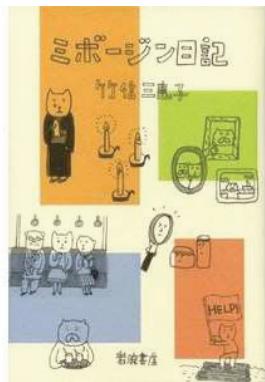
日本でも18歳成人が始まり、きっと学生たちは、教育現場で制度のことは学んでいると思います。ノルウェーの見習いたいところを取り入れ、政策を討論し、主権者である国民誰でも（選挙権がなくても）聞くことができ、質疑応答もでき、そして選挙に行こうと思える新しい選挙制度を作りたいです。

かなり大変な問題ですが、18歳成人に伴い今までに経験したことのない若い人たちと一緒に学び、選挙制度のこと、国のことが変えられたらいいなと感じた一冊です。

（あや）

『ミボージン日記』

竹信三恵子
岩波書店
(2010年)



パートナーシップさいたま主催のライフキャリア講座「女が働き続けるということ」で竹信三恵子さんの話をオンラインで聞いた。日本の女性が働き続けるための制度の確立や運用が不十分であること、ジェンダー平等の意識が行き渡らないことなど資料を駆使して語ってくださいました。竹信さんご自身が働き続けてこられたからにはたくさんの壁を乗り越えたのであろうと思ったとき、この辺は本に書きましたからそちらを、とサラッと語られた。もう12年も前に読んだこの本を、古さを感じず再読した。

学生時代に知り合った「タケノブさん」と共に大手の新聞社に入社した三恵子さん。結婚して子どもも生まれた。当時の女性記者は1%以下、女性問題も人権問題も触りたくないテーマとして隅に追いやられる会社で奮闘する三恵子さんに「タケノブさん」の存在は大きい。「やめるなんてとんでもない。会社にしがみついて、ちゅうちゅう養分を吸う覚悟で生きなきや。」と「タケノブさん」に励まされ、男性中心社会に挑む。ところが、三十年間一緒に暮らした「タケノブさん」が急死したのである。突然「ミボージン」になってしまった。「未亡人」は差別語として、今では新聞社も使うことを控えている呼び名。

三恵子さんが体験した様々なこと、そして感じたことが綴られる。「自分を元気にするのは、結局は自分しかない。」という覚悟のようなものを身につけ、「生きていればどこかへたどりつく」とトンネルの出口の先に踏み出そうとしている。その姿に、すごい人だなあと思うとともに、「ミボージン」でなくとも、女性の前に立ちはだかる壁を人任せにせずに私もさやかでも削り取る力を持ちたいと感じさせられた本であった。

（議部）

さいたま市女性学研究会(ゆい)主催

「ブックトーク&井戸端会議」第22回

2022年9月18日(日) 14:00~16:00

(パートナーシップさいたま会議室)

テーマ:「聞いて、私の体験！！」

新型コロナウイルスとの共存・共生という意味のウィズコロナの社会で、

私たちの暮らしは、大きく変化しました。さらに、攻め込んだロシアと

ウクライナとの戦いは、いつまで続くのか、私たちの生活に多くの影響

が振りかかっています。そこで生きていく私たちが、経験したこと、

または聞いたこと、見たことなど話してみませんか。

お互いの思いを話せる場にしたいと思います。

参加希望の方は、事務局までご連絡ください。



1ページで紹介した

冊子「小学6年生の時に感じた戦争への疑問」(左)

絵本『じゅうのめがみさん』(右)

■パートナーシップさいたま耳寄り情報■

女性の知恵で社会をデザインする講座 ~プレセミナー~

「自分達が暮らす社会に希望を持つために」

講師:岩本美砂子さん(女性政策研究家、三重大学名誉教授)

・プロフィール

1957年生まれ。専門は女性学および政治学。京都大学法学部卒業、名古屋大学法学研究科博士課程中退。名古屋大学法学部助手、三重大学助教授をへて1996年より三重大学人文学部法律経済学科教授、2022年3月定年退職。主要著作『百合子とたか子 女性政治リーダーの運命』(岩波書店、2021)

・オンデマンド配信講座

動画配信期間:令和4年8月21日(日)~8月31日(水)

申込期間:令和4年7月5日(火)午前9時~8月17日(水)

詳細及びお申込みはホームページから

(<https://www.city.saitama.jp/006/010/002/004/p089467.html>)



ホームページでは、女性が生活の中で感じる悩みや疑問が地域や社会の問題であることを学び、発表する「女性の知恵で社会をデザインする講座」本編のご紹介もしています。
そちらもぜひご確認ください。

「ゆい」2022年夏号 第5号 (2022年7月1日発行)

編集 さいたま市女性学研究会(ゆい)

マーク、題字、イラスト 野田

<事務局> 磯部幸江 電話 048-641-3765 Eメール i.sachie@nifty.com



発行 さいたま市男女共同参画推進センター | パートナーシップさいたま

〒330-0854 埼玉県さいたま市大宮区桜木町1丁目10-18シーノ大宮センター3F

電話 048-642-8107 FAX 048-643-5801

<https://www.city.saitama.jp/006/010/002/index.html>